

B BOOKS

久原正治

立命館アジア太平洋大学経営大学院教授

『マネージャーの学ぶための戦略経営』

マネージャーの仕事は会計や財務・マーケティング・人事などの単なる職能管理ではなくそれらを統括する戦略的思考であると位置付けて、一九〇八年に設立されたのがハーバード・ビジネススクールである。ここでは設立後もなく経営の各個別分野を統合した経営判断を学ぶ「ビジネスポリシー（経営政策）」のコースが設けられ、それが現在の「ストラテジックマネジメント（戦略経営）」のコースに発展している。つまり戦略経営とは、一つの独立したビジネス部門を統括するマネージャー（部門長や部長）やいくつかのビジネスを束ねる本社のマネージャー（本社部長）あるいはトップマネジメント（CEO、COO、CFOなど）が直面する戦略的課題をより広い視野で考えるための論理的思考方法や問題分析のための概念的枠組みのことを指している。

今回は、経営管理者層のビジネスメンがビジネス部門や企業全体の戦略的経営を考えるとき、その論理を整理するのに最適かつ最良の洋書と和書を一冊ずつ選んでみた。世の中ではカタカナ語の氾濫した経営戦略関連の本が山のように並んでいるが、読者

の皆さんは「この一冊だけに集中して戦略経営について思考をめぐらしてみたい」と、参考になることが多いのに気づくし、またこれまでのビジネスで日常的に考えていたことがすっきりした概念によって整理されるであろう。



Strategic Management

Garth Saloner, Andrea Shepard and Joel Podolny
Jon Wiley & Sons, Inc. 2001
(石倉洋子訳『戦略経営論』東洋経済新報社、2002年)

はスタンフォード・ビジネススクールのテキストである。戦略策定者としてのマネージャーをシエネラルマネージャー（経営者）、コーポレート（本社）マネージャー、事業マネージャーの三つに分けその戦略における役割と思考の枠組

みを論理的に説明する。企業の競争優位はその資産や組織のあり方の内的コンテクストと、企業のおかれた政治経済や業界の環境の外的コンテクストの両者の影響を受け、その結果が業績につながる。マネージャーの戦略的



競争戦略論

青島矢一・加藤俊彦 著
東洋経済新報社
2003年

経営の仕事はこの内外のコンテクストを理解し、目標を達成するのに最善の行動を選択する指針となる枠組みについて考えをめぐらすことである。企業を経営するマネージャーの立場から、より現実に近い枠組みを用いて論

理的に戦略について説明している点で、経営管理職層が時間をかけてじっくり読めば本書から学ぶことは多い。翻訳も正確で読みやすいように良く考えられているので、時間のない人は翻訳を読まれることをお勧めする。

この戦略について日本の企業の実情をよく理解している学者たちがアメリカで発達した理論的枠組みを日本企業の実例に当てはめて分かりやすく書いた良書である。マイケル・ポーターは日本企業には戦略がないというが、実はアメリカのテキストに書かれたような戦略は各企業がそうとは知らずに実践しているケースが多い。問題はアメリカのようにビジネス専門教育がまだ発展していない中で、日本の経営管理職層がここで書かれたような概念化の論理を理解していないため、日本企業には戦略がないように見えるところにある。書店に並ぶ日本人著者による経営戦略関連の書を手にとると、横文字の断片的ツールを縦にしてつなぎ合わせただけのものが多いのに気がつく。それらに比べると本書はカタカナ語は最小限に抑え、論理を四つのアプローチから概念化し、その概念を使って実務家が納得できるように経営戦略を説明している。経営管理者の必読書と言える。